

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



真宗門徒講座にて『歎異抄』について「私の受け止め」を語る研究生（4・5面）

（写真の無断転用はご遠慮ください）

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・聖典研修 第1回
親鸞聖人の御生涯に聞く ②・③
「親鸞聖人の御生涯に聞く」とは
- ・研究生実習
真宗門徒講座 ④・⑤
新しい講座のあり方を目指して
- ・大谷派の近現代史
第29回平和展 ⑥・⑦
「仏教の社会活動-日中戦争と大谷派-」に向けて
- ・INFORMATION ⑧

◆イラストカット集（※寺報などにご利用ください）

百重千重囲繞して よろこびまもりたまうなり

名古屋別院から御正忌報恩講に参拝させて戴いた（本誌8面）。御影堂には、既に大勢の参詣人が座っておられる。見知らぬ人々の中に身を置きながらも、不思議な安らぎに包まれたように感じる。同席した御同行が、

しかし、我が身の事実が知らされたとしても、すぐ様、自分の思いで捉える「我が計いの世界」へ逃げ込んでしまうのである。如来は、私を喚び覚まそうと本願の名号「南無阿弥陀仏」で喚びかけます。

念仏を申し込んでも、いま申し込める念仏そのものが自分を助けるとは思えない。聞法してきた自分の体験、聴聞して蓄積した知識と自分の解釈、そして、長年、真剣に念仏する自分の努力が自分を助けると思っている。

おかげと、報恩講さまにお参りができました。私が今ここにお参りできるのも、祖母に手をひかれてお参りしたことに始まります。祖母は、「お寺の報恩講に参れた年はそれだけで尊い一年だったし、本山参りが叶った我が生涯は、思い貽すことのない無上の生涯だった」と、語っていたことが思い出されてきます。

と、涙を浮かべながら亡き祖母の想い出話を語られた。そのことは同時に、『正信偈』を唱和する人々の念仏の声が「十方無量の諸仏」となって私を囲み、私に喚びかけ教化する諸仏「化仏」として座しておられることに改めて気付かされる。

だが、それは同時に他者の念仏や聴聞と比較して高慢になるか卑下するか、はたまた、疲れはてて懈怠となるかである。聞法も『正信偈・和讃』の勤行も、他者の在り様を見て、比較し優劣を思うだけで、宗祖の如実の言が自分の心に響くことも、三千大千世界を揺るがす感動もない。この姿勢こそ、我が計いの世界へ逃げ込むことなのである。

阿弥陀の仏国土は、いつか、どこかに阿弥陀の国として閉じられてあるところではない。諸仏の国土・諸智土・無量光明土として十方に開かれている世界である。我ら衆生を、十方無量の諸仏が百重千重に囲みめぐらし、問いかけ照らしだすということは、現世の生活が限りなく本願念仏の教えに教化され導かれていくことである。

七五六年前、各々十余か国の境を超えて、廟堂に詣した遺弟たちの末裔が、逃げる私を今も尚、十方無量の諸仏となつて百重にも千重にも囲みめぐらし、よろこびまもり、我が生涯を「思い貽すことのない無上の生涯であれ」と願い続けてくださったのである。

聖典研修

2017年9月25日

親鸞聖人の御生涯に聞く

第一回 「親鸞聖人の御生涯に聞く」とは

講師 東館 紹見氏 (大谷大学教授)



今年度より、親鸞聖人の御生涯と、聖人が生きられた時代をテーマとした聖典研修が開催されることになった。

親鸞聖人が著された聖教の背景に存在する、時代社会からの要請や課題とはどのようなものだったのか。また、どのような人々と共に生き、歩まれていったのか。今号より、講義で提示された課題の一部を紹介したい。

「私」を語らなかつた親鸞

私は歴史学を専門としておりますので、その視点から親鸞聖人の御生涯についてお話ししていくわけですが、その根底にあるのは一人の念仏者として生きられた宗祖のお姿です。全ての人間存在における普遍的課題、真実の救いというものを、身をもって明らかにされたからこそ、私たちは宗祖と呼びするのでしょう。この普遍的課題の追求はどのような歩みによってなされていったのか、歴史的な考察もふまえてお話ししたいと思います。

親鸞聖人の御生涯を見ていく時に留意しなくてはならない大事なことのひとつとして、親鸞聖人が御自身の世系・出身に關して一切語られていないという点が挙げられます。同時代の家族・門弟も様々な書き物を残していますが、

宗祖のお生まれについては言及していません。このように、あえて語らなかつたという事実には、とても大切な意味が込められています。そこから、親鸞聖人の歩みと置かれていた状況が窺えるのです。

さて、親鸞聖人は御自身についてほとんど語られませんが、『教行信証』『後序』において、二つの事柄だけは書いておられます。一つは二十九歳の時の、法然上人との出会いを通じた阿弥陀仏の本願への価値。もう一つは三十五歳の時の、専修念仏の弾圧です。四人の方が死罪、そして法然上人は土佐（実際に行かれたのは讃岐）、親鸞聖人は越後、そのほかの方もご流罪となり、吉水教団は解散しました。この二つのみを御自身のこととして語られる宗祖の姿勢に大切な意味があるのだと思います。

また、当時の記録に親鸞聖人のお名前が全く出てこないということも重要な事柄を示しています。ここでの記録とは日記のことですが、平安時代の貴族は、自分の日々の感想を残すためではなく、仕事の業務日誌、本人や子孫が政務や儀式などの手順を間違えないための記録として日記をつけていました。その記録の中に、当時の世の中の動きや、それに關わつた人物なども書かれているのです。

例えば、三条長兼の『三長記』には、念仏弾圧の経緯が詳しく記されています。その際、法然上人や門下のお弟子の方々の名前が出てくるのですが、親鸞聖人の名前は出てこないのです。また、法然上人と親交のあつた九条兼実の『玉葉』でも、その他の日記を見ても、法然上人のことは書かれているのですが、親鸞聖人はやはり出てこないのです。それだけではありません。浄土宗関係の史料、つまり、法然門下の同門の方々の記録を見ても、多くの門弟の名前が挙がる中、親鸞聖人の名前だけは出てこないのです。

こういった事柄から、親鸞聖人の活動範囲が窺えます。公的な記録（貴族の日記）に名前が出てこないということは、社会的地位の高い人々との関係に重きを置いていなかったということです。もし関わりがあるならば、貴族がその記録を残さぬはずはないのです。

また、同門の史料に名前が出てこないということは、親鸞聖人が当時の仏教の主流とは異なる立場を貫かれたということを示しているのです。平安末に正統的

な仏教の中心として大きな勢力を持っていたのは、天台宗や真言宗、それから奈良の仏教諸宗でした。そして、浄土宗の主流を為している流派は、この当時中心であつた仏教と親和性のある教えの受け止め方をしているのです。ですから、正統的な仏教の立場と一線を引かれた親鸞聖人とは思想的に相容れないものがあつたからこそ、その名前が出てこないのでしょう。

「親鸞」という人はいなかつた？

親鸞聖人御自身が語らなかつたその生涯を学ぶ際、聖人が記していないことを詮索するだけでは、親鸞聖人の歩み（姿勢）を受け止めることは困難なものとなるでしょう。自身のことを語らない聖人の意図からも逸れると言えます。親鸞聖人が語られなかつた生涯の内容を知り、語られなかつた理由や意味、宗祖が置かれていた状況を考える。そのことを通して、宗祖が抱えていた課題を、現代の私たちにも通じる普遍的課題として理解し、共有していくことが大切なことなのではないでしょうか。

このような、親鸞聖人の生涯を学んでいく際に問われてくる事柄は、親鸞伝の研究が進む中で提起されてきた課題だと言えます。繰り返しになりますが、親鸞聖人は御自身の出自などを一切語られませんでした。ところが、覚如上人は「御

伝鈔』において、親鸞聖人は藤原氏の出身だと明記されます。人々はこの記述を受け取って信じ、雲の上の人という親鸞像が歴史の中で次第に受け継がれてきました。

しかし、時代が明治・大正となり、いわゆる近代的な学問研究が進む中、この記述に疑いが向けられるようになりました。本人だけではなく、同時代を生きた家族・門弟も語られていない聖人の出自について、その曾孫である覚如上人が言い始めたことを全面的に信用することができなのか、となったのです。さらには親鸞聖人は実在しなかったという説まで登場しました。覚如上人の置かれていた状況や、親鸞聖人の出自を前面に出さなければならぬ理由などを考える必要は当然ありますが、この親鸞伝への疑義はとても大事なものでした。それ故、歴史文献を基にする実証的研究が多く、研究者によって進められ、宗祖の生涯においても、いろいろなことが明らかにになりました。

例えば、東京大学の歴史学の大家であり、仏教史、真宗史に多くのすぐれた業績がある辻善之助（一八七七―一九五五）先生は、多くの史料に当たって親鸞聖人の筆跡の研究をなさり、御真筆を確定する作業をなさいました。そして「この筆をもって『教行信証』『和讃』をお書きになった方は間違いなくいらっしゃる。その方を私たちは親鸞聖人と呼びたい」ということを明らかにしてくださ

いました。

また一九二一（大正十）年には、西本願寺に所蔵されていた恵信尼様のお手紙が「これは親鸞聖人の伴侶であられた恵信尼様のお手紙である」と明確に示され公開されました。お手紙の存在はそれ以前にも知られてはいたのですが、やはり公開すべきという時代の要請があったのだと思います。本願寺派の鷲尾教導（一八七五―一九二八）先生によってそのお手紙が紹介され、これによっても、「恵信尼様が文献の中で記しておられる親鸞聖人という方は、確かにいらっしゃる」ことが明確にされました。

なぜ親鸞伝を学ぶのか

もうお一方、大谷大学や、同朋大学の前身である真宗専門学校で教鞭を取られた山田文昭（一八七七―一九三三）先生についてご紹介します。親鸞聖人の出自が藤原氏であることを証明する史料として、貴族の系図が記された『尊卑分脈』があります。実証的研究が進む中、この『尊卑分脈』に示される親鸞聖人の系図に対する矛盾点が研究者に指摘されるのですが、その矛盾を解明されたのが山田先生です。また、先生の講義録が『真宗史稿』という本になっているのですが、実証的な親鸞伝研究の大枠を確かめる際には、現在でも、まずこの『真宗史稿』を見るようにと言われております。

そして山田先生は、文献を研究して事実を明らかにするだけではなく、「なぜ親鸞伝を実証的に研究していくのか」という大切な課題をも提示してくださいました。文献研究が進められ、その記述の正誤が確かめられていくことは大切なことなのですが、そればかりに目がいきますと、何のための研究なのか分からなくなってしまうのです。近代的な学問研究が進められる時代の中、親鸞聖人の生涯に学ぶということをどのように受け止めていくのか。その問いに対する山田先生の応えが『黒衣の聖者』という本に示されています。

貴族の栄華から脱れ、聖道の難行から脱れ、律僧の生活から脱れ、更に人師（人の上に立つ人、そのようになろうとする意識）の羈絆（束縛）から脱れて赤裸々の姿となった聖人は、全く一個黒衣の沙弥（無位の僧侶）であった。久遠以来の凡夫であった。久遠以来の凡夫が大悲の願船に乗託して悠々として帰りゆく自然の風姿は、そのまま聖者ではあるまいか、私は澄み切った秋の天空を仰いで、静かに帰りゆく一片の白雲を眺むるとき、いつもこの黒衣の聖者を憶い起さずにはいられない。

※（一）内は加筆

墨袈裟のみを生涯にわたってお召しになられたのが親鸞聖人であるという、先生のいただきが窺えます。実証的な研究を通して明らかとなった宗祖の歩みに、

確かな存在としての親鸞聖人を見ておいでになったのでしょうか。

また、事象研究が盛んになっている時代の中、金子大榮（一八八一―一九七六）先生は『真宗学序説』において、学問に対する本質的な問いかけを示しておられます。

御伝記がだんだんわかって来て、ようやく『教行信証』の味わいがわかるのであるか、或いは、そういう伝記は一切わからぬでも『教行信証』というものを読んでいって、そこに、親鸞聖人という方の面目が現われているのではあるまいか（中略）『教行信証』そのものを見ていけば、親鸞聖人という人間がある。そこに、ハッキリと親鸞聖人という人間が、その文字のうえに生きている。

真宗学にしても、歴史学にしても、それを学ぶ私たち一人一人がその立ち所を明確にするこの重要性をおっしゃっておられます。

改めて、私たちはなぜ親鸞聖人の御生涯を学ぶのでしょうか。少なくとも、親鸞聖人がその著作の中で御自身について語られる記述は、私的な境遇や感情に止まるものではありません。その内容は仏教と人間との関係であり、歩みにおける普遍的な課題であると考えます。そのことを十分に思いながら、親鸞聖人の御生涯に聞いていかなければと私自身思うのであります。

研究生実習

真宗門徒講座

新しい講座のあり方を目指して

二〇一七年四月、今年度の「真宗門徒講座」が開講した。名古屋別院主催の当講座は、入門講座として開かれており、教化センター研究生が中心となって企画・運営を行い、各組・各寺院の同朋会などで活用できるような講座となることを願いに取り組んできた。

今年度は「はじめての『歎異抄』——親鸞聖人のお言葉にふれよう——」をテーマに、全十一回の講座を進めている。「はじめて『歎異抄』にふれる方でも楽しく学べる講座にしたい」「若手僧侶だからこそできる表現方法はないか」という研究生たちの思いから、各章ごとの課題を受講者と共有することを願い、寸劇や歌、映像などの表現方法を用いた「問題提起」と、研究生による「私の受け止め」の発表を講座の冒頭に行っている。

今号では、新しい講座のあり方を目指して模索する研究生たちの試みの一部を紹介し、スタッフとして参加した研究生が何を感じているのかを報告する。

第一章「弥陀の誓願不思議」

——仏の願い、私の願い——

【問題提起】

第一章の中心となる「弥陀の誓願不思議」に関して、阿弥陀仏の誓願（本願）が建てられるまでの背景や、願いの本がどのようなものか、詳しく知っている方は少ないのではないか。そのような意見のもと『仏説阿弥陀経』に説かれる、法蔵菩薩が阿弥陀仏となられるまでの物語を表現した。

選んだ題材はペープサート（紙人形劇）。台本、イラスト、劇中の音楽など、すべてを研究生たちが考え、作り演じた。



【私の受け止め】

小さい頃から人付き合いが苦手で、「自分」を表現できないことが苦しくて、自分を変えなければ幸せにできないと思っていたが、ある時、友人に「君は、君だろ」と言われた。

その言葉は、どんな自分でもまるごと包んでくれる法蔵菩薩、阿弥陀仏の願いそのものに感じられ、生きる力をいただいた。

第二章「名号の開く世界」

——命懸けの問い——

【問題提起】

第二章では、京都にいらつしやる聖人のもとを訪ねる門弟たちの姿を表現した。聖人とお会いした後の門弟とのやり取りが著された背景として、当時の関東ではどのような出来事が起きていたのか。自らの命を顧みず、京都



にいる聖人を訪ねずにはおれないほどの状況となっていた、当時の関東における念仏の教えに対する迷いと混乱の様子を、寸劇で伝えた。

【私の受け止め】

今まで、自分が命懸けで何かをしたことがあったのか。自らの「生」を「当たり前」のもの、「死」を「あり得ない」ものとして考え、生活してきた。

しかし、先に生きた方々が命懸けで私のところまで届けてくださった念仏の教えの中に、私の生活があったのだと気付かされた。念仏の教えにふれることで、自分の人生全てを受け入れて生きていくことができるのではないだろうか。

第三章「悪人成仏」

——善に立つ私——

【問題提起】

第三章では、「悪人」についてどのようなのかを話し合う様子を表現した。

ある架空の殺人事件をテーマに、その事件の背景について四人の研究生が考え語り合う公開座談会を行い、それぞれに

- ・自分は絶対に人殺しなんてしない
 - ・状況次第では殺してしまうかも
 - ・殺してしまった人も救われるのか
- と意見を交わし、「悪人」「善人」について考えるきっかけを作った。

【私の受け止め】

ボランティア活動に参加しているうちに、「自分は他の人よりも善い人間だ」と思う自分がいた。しかし、「善人」と「悪人」が別々にいるのではなく、状況次第で、善い方向へも悪い方向へも簡単に転んでしまふ。



私は、自分の力で「善いこと」をしているのではなく、様々な縁に支えられているのだと気付かされた。

研究生たちの声

仏教の学びを身近なものに

今回の真宗門徒講座では、講義への導入として、各回の内容に関連した劇やクイズなどを研究生が企画しています。その願いは、難しいものと捉えられがちな仏教の学びを、より親しみを持って自らに身近なこととして、受講者の皆さんと共に学び、考えたいという思いからです。親しみやすく楽しめるものにするため、受講者の皆さんにわかりやすく伝わるように心掛けています。しかし、一言でわかりやすくと言っても、「何をするのか?」「どのような表現方法にすればいいのか?」「企画を通して何を伝えなければならぬのか?」ということを、毎回決まった形が無い中で、真剣に考えながらゼロから作り上げなければならず、多くの苦勞があります。この企画の作業は私（たち）自身が『歎異抄』のそれぞれの章の内容をより深く学ぶ大きな契機となっています。



そして、一人では行えないような取り組みができていくことは、今回のこの講座ならではのと思えます。準備をする中で、皆であれこれ言いながら一つのものを作り上げ、実際に発表をしていく一人ではできない

いものを皆で作りに上げていく実感があります。研究生自身、楽しみながらやっておりますので、受講者の皆さんにも楽しんで学んでいただければと思います。

第十二期研究生 小塚 順

ともに楽しく学ぶ

今回の門徒講座で、私は第三章を担当しました。発表にあたり、資料などを読み返しましたが、『歎異抄』を学ぶのは大学のゼミ以来だったため、何を話したらいいか、どこから手をつけたらいいかわかりませんでした。事前の学習会でレジュメを提出し、皆に指摘してもらい、主幹との打ち合わせで指摘をしていただき、ますますわからなくなる、この繰り返しでした。しかし、この指摘のおかげ



で普段の生活ではあまり感じていなかった「善に立つ自分」の存在を気付かせていただきました。今回の講座を通して『歎異抄』に向き合えたのかなと思います。皆で取り組んでいる問題提起も、私にはとても勉強になります。これまでの真宗門徒講座では、自分の担当の時以外は積極的に参加することができませんでした。しかし今回は問題提起を通して、どのようにしたら受講者の皆さんに楽しくわかりやすく伝えられるのか、私自身も楽しく、新鮮に親鸞聖人の教えに学べているように思います。

受講者の皆さんも同じような気持ちで講座の時間を過ごしていただけたらありがたいと思っています。

第十一期研究生 鍋野 了悟

私が問われる講座

私は『歎異抄』第四章を担当し、父の死という事実を通して「聖道・浄土のかわりめ」という課題と向き合った。

事前の打ち合わせの時、「あなたの発表は、言葉がきれいです」「言葉を取り繕って語っているだけで、嘘を語っている」という言葉をいただき、「そんなことはないだろう!」と内心では反発していた。その時の私は『歎異抄』を受講者の皆さんに理解してもらおうと、話の内容や構成を吟味することに意識を向けていた。しかし、わかりやすく伝えることに必死になっっている私は、一体どこに立って語っているのかということが問われてきた。

真宗門徒講座は、講座当日だけでなく、そこに至るまでの過程の全てが研究生の学びの場となっている。各自が担当の章

において下調べをし、自分自身の受け止めを確かめ直す。他の研究生やスタッフと議論する中で、時には厳しく問い正されることがある。その中で受講者の皆さんと本当に共有したい課題を明確にしていく。このように若い研究生たちが、必死になって一つの講座を作り上げていく姿に刺激を受け、私自身もわかったつもりになっていた『歎異抄』と向き合う姿勢について、あらためて考えさせられた。

第九期研究生 堂宮 淳賢

今年度の「真宗門徒講座」では、研究生による問題提起、私の受け止め文の作成など、毎月何度も事前学習を重ねながら、講座に向けて取り組んでいる。

二十代、三十代の若手僧侶が中心となる研究生。「まだ若い自分たちだからこそできる表現方法はないか」と、いろいろな形で問題提起の方法を皆で考え、発表してくれている。

研究生一人一人が『歎異抄』のお言葉をしっかりと受け止め、講座に立てているのかという点、疑問が残る部分もある。もっと学びを深めなければならぬと感じることも多い。今回の講座を通して、親鸞聖人のお言葉を受け止め、自分たちの言葉で表現するということの難しさを感じている。

この講座も折り返し地点を過ぎた。残された課題は多いが、この取り組みが今後の教区・組・寺院での教化活動の礎となることを願い、最後まで全力で取り組みたい。

業務嘱託 加藤 浄恵

の史
派代
谷近

第二十九回平和展

「仏教の社会活動―日中戦争と大谷派―」に向けて

研究員
新野和暢にいの かずのぶ

はじめに

戦争の問題を取り上げていると、「当時は、戦争反対などと公言できる状況ではなかった」といった意見に出くわすことがある。確かに、治安維持法などによって国民生活は極度に統制されており、政府の方針に反対したり、自らの思想や信仰を公にしたりすることが簡単ではなかったことは事実であろう。しかし、それだけが事実なのだろうか。歴史を振り返ると、逮捕されることを覚悟して、堂々と戦争反対を主張した方々がいる。仏教が指し示している平和や命の尊さや、阿弥陀仏信仰を説いた人物もいる。

そうした方々が投げ掛けている課題を問題意識に持ちながら、今回の平和展は、一九三七（昭和十二）年七月七日に北京郊外で起こった盧溝橋事件をきっかけにして日中戦争へと突入していった時代を取り上げる。「満洲事変」による大陸侵略が中国全土へと拡大していく中で、大谷派が果たした役割を検証することで、「時代」と「仏

教の実践」について考えたいのである。

日中の反戦僧侶

今回の特別展は、仏教の信仰に基づいて戦争反対を主張し続けた「反戦僧侶」にスポットをあてることにする。なぜなら、彼らの言動は、仏教がどんな時代にあっても通用する真理であることを示しているからである。

これまでに開催してきた平和展では、「戦争は罪悪である」と言い放った竹中彰元（一八六七―一九四五）や、「生きて帰ってこい」と出征兵士に声を掛けた植木徹誠（一八九五―一九七八）、それに、阿弥陀仏への信仰を堅持して大谷大学の学長を追われた河野法雲（一八六七―一九四六）など



反戦僧侶・竹中彰元

の事跡を繰り返し紹介してきた。彼等が示した社会へ向き合う視点を掘り下げて紹介することで、「現代の治安維持法」と言われる「共謀罪」などが成立した現代社会に生きる私達が学ぶべき視点を確認することがねらいである。

また、今回の特徴は中国人僧侶が戦争に反対した事例も紹介する。日中戦争を侵略と言いつつ、日本の僧侶に戦争反対を呼びかけた中国の僧侶がいた。それが、南京・毘盧寺の太虚（一八九〇―一九四七）である。彼は、当時の中国仏教最高指導者と言われた僧侶であり、中国や台湾で仏教の中興と目されている。戦時中には日本の仏教家と交流をもっており、一九三一（昭和六）年に「満洲事変」が起こると、これを侵略戦争と指摘し侵略反対を日本の仏教者に訴えている。

「一殺多生」の論理

中国仏教の訴えに対して、仏教界の有力者で結成された明和会（会長＝真宗木辺派法主・木辺孝慈）は、「一殺多生はこれ大乗仏教の厳粛に容認する所である」などと、平和構築のための聖戦ゆえに中国侵略を容認させようとする文書を太虚に送っている。また、学術研究の窓口的機関として一九三四（昭和九）年に設立された「日華仏教研究会」（会長＝法隆寺貫首・佐伯定胤、副

会長＝高楠順次郎、幹事長＝林彦明）は、一九三七（昭和十二）年十二月に「告支那佛教徒諸君」と題する声明を出して日本の戦闘行為の正当性を主張している。

中国仏教に対する声明で、「亜細亜民族は一致団結して領土に野望を懐く欧米並に人類共同の敵たるソ連に当らねばならぬ時である」「日本が支那領土を侵略し、非戦闘員を殺傷するといふが如きは全く事実と相違する」「諸君は共產主義者輩が貴国の仏教が次第に最後の関頭に近づきつつあるを知らざるか。彼等こそ我等佛教徒の共同の敵にあらずして何であらう」などと述べて、反省を促した。これに対して中国側の青島・湛山寺の倏虚による書簡（一九三八年三月二十五日）には、「日支両国民の親善と幸福を増進せしむるを目的と確定し候」とあり、日中の仏教家がお互いに平和に取り組むことに期待を寄せる内容が見られるのである。

そして、毘盧寺を舞台にした名古屋との接点がある。一九四一（昭和十六）年に名古屋市瑞雲寺旧蔵十一面観音像と、毘盧寺



毘盧寺の本尊・千手観音像



「英霊」とともに南京入城する日本軍（絵葉書より）

の本尊である千手観音像の二つの観音像を交換する宗教工作である。当時の新聞報道を見ると、仏像の交換によって日中親善を演出することの目的は、達成されていたように見受けられる。しかし、毘盧寺は全面的に協力したわけではなく、抵抗していた事実もある。

「南京攻略戦」と日本仏教

この件を浮き彫りにするにあたって、今から八十年前の一九三七（昭和十二）年十二月の「南京攻略戦」における状況を宗教の視点で確認しておこう。日本が南京を攻略した際の日本仏教の行動については、野

世英水「戦時下『真宗』舎の軍隊慰問―本願寺派法主『中支皇軍慰問』をめぐって―」（『真宗』と靖国）一九九一年四月一日）と、大東仁「占領下南京の宗教工作」（『東アジア研究』第四十八号、二〇〇七年三月三十日）があり、日本の仏教各派が南京に開設した「宗教施設」と「従軍僧」の行動を紹介している。そしてこの度、平和展スタッフの大東氏によって新たな資料が発表されることになった。

資料は、占領地行政を担当する日本政府機関「興亜院華中連絡部」が実施した「宗教事情調査」の記録である。藤本智董という人物が二十日間に亘って現地調査したもので、『南京及蘇州に於ける佛教の實情調査』（一九四〇年五月）に纏められている。資料によると、

僧侶約二十四五人、尼僧十七八人死亡

多くは流弾にて死亡したものであると云ふ

と報告されている。「南京攻略戦」では、少なくとも四〇以上の僧尼が犠牲者となった事実が認められるのである。また、戦闘時、寺院などの宗教施設が被害をこうむることは想像に難しいことはなく、銃砲弾の来たところは多少の被害があり、未だ精査には

至らないが、被害寺廟は五〇以上はあると報告されている。

また、南京での状況を知るべく、南京を占領した後に杭州を占領した「丁集団」の参謀長が一九三七年十二月二十日に出した通牒を紹介する。ここには

略奪婦女暴行、放火等の厳禁に関して
は屢次訓示せられたる所なるも本次南京攻略の実績に徴するに婦女暴行のみにても百余件に上る忌むべき事態を発生せるを以て重複をも観みす注意する

丁集参一第一四五號
杭州占領三件ヲ秩序維持及配宿等ニ關スル件
十二月二十日 丁集團参謀長
第十八師團参謀長
第一後備歩兵團司令官
鐵道第四大隊長
杭州攻撃参加ノ軍直轄部隊隊長
杭州攻略ニ關シテハ特ニ左記諸件ヲ十分諸隊徹底
勵行セシメラレ度依令通牒ス
左記
「掠奪婦女暴行、放火等ノ嚴禁ニ關シテハ屢次訓
示セラレタル所ナルモ本次南京攻略ノ實績ニ徴スルニ
婦女暴行ノシテモ百餘件ニ上ル忌むべき事態ヲ發
生セラルバテ重復モ觀ミス注意スル所アラントス
杭州及英干山附近ニハ外人ノ權益又ハ別荘等相
當ナル數ニ上ルヲ以テ作戦行動上萬已ムヲ得サル
場合ノ外嚴シク之ヲ犯ササルコト
又諸隊ニ於テ戦闘ノ必要上其權益ヲ犯シタルトモハ
努メテ現地解決ノ手段ヲ講スル共ニ機ヲ失セス集
團司令官及最寄憲兵ニ報告及通報スルコト
杭州ノ攻略ニ方リテハ城壁占領後直主カ力ヲ市街
ニ投入スルコトヲ各部隊ヲ以テ市内ノ掃蕩ヲ實施シ
概ネ秩序ヲ恢復シタル後宿營警備區域ニ進入スルコト
第十八師團ヨリ步兵各中隊ヲ連日本領事館
附近ニ出シ集團憲兵隊長上砂中佐ノ指揮ニ入リテ

「第10軍作戦指導に関する参考資料」（アジア歴史資料センター Ref.C11111743800）

所あらんとす

（アジア歴史資料センター所蔵資料より）

とあり、南京攻略を前後して、少なくとも約百件の婦女暴行事件があったことが記されている。こうした被害状況の報告も、今回の平和展で紹介する内容の一つである。

中国仏教の抵抗

そして、特別展で紹介する抵抗の内容は、毘盧寺の住持（住職）が仏像交換する際に名古屋へ訪れていない事実である。そもそも毘盧寺の住持について藤本が「此寺に興亜佛教班員を駐留せしめむとせしことがあったが、住持は言を左右にして容易に快諾を得へなかつた」と記しているように、占領政策に非協力的な姿勢を見せていた。ゆえに仏像交換による「日中友好」にも賛成していなかったと思われる。事実、興亜院の調査結果には、「病氣のため使節を辞退」を申し出たことが記されている。その後、毘盧寺の副住持による随行が決定したようであるが、結局彼も随行しなかった。こうした行動は、日本側への意図的な抵抗と考えられるのである。

このように、抵抗の実体を特別展で取り上げながら、侵略が拡大してゆく歴史とリンクする大谷派の戦争協力の事実を浮き彫りにする。

研究生 現地研修

私にとって報恩講とは
—ご門徒と共に学ぶ団体参拝—

11月24日、名古屋別院主催のもと、教化センター研究生の案内による真宗本廟（東本願寺）報恩講団体参拝を総勢90名で行った。午前8時に名古屋別院を出発。車中、御絵伝のDVDで聖人得度の場面を学習し、午前11時頃に「青蓮院」に到着した。「青蓮院」では聖人の剃髪が安置されているという「植髪堂」で御絵伝の絵解きを聞き、その後、研究生の案内により「得度の間」を拝観。午後からは、しんらん交流館で精進弁当をいただいた後、中津夜の法要に参拝した。

参加者からは、「植髪堂でのお話はわかりやすく面白かった」「交通渋滞で最後まで聞けなかったのが残念」「毎年、内容が違うので楽しみ」などの声が聞かれた。

研究生たちは、本企画に向けて下見と学習を行ってきたが、紅葉の時期と交通渋滞が重なり日程が遅れるなどのアクシデントもあり、企画の難しさを教えられた。

年々参加者が増しており、若手僧侶の企画による団体参拝が期待されていることが伺える。今後も組・寺院で活かされるような企画に取り組んでいきたい。

現代社会と真宗教化 報告
第9回 自死者追悼法要
「いのちの日のいのちの時間」厳修

主催:いのちに向き合う宗教者の会 後援:名古屋教区教化センター

12月12日、曹洞宗永平寺名古屋別院（東区代官町）にて、自死遺族34名と超宗派の僧侶によって、第9回自死者追悼法要「いのちの日のいのちの時間」が厳修された。

警察庁が公開している「平成28年中における自殺の状況」による自死者数は21,897人で、ピーク時の34,427人と比べれば減少している。とはいえ、1人の自死者に対し5人から10人の方々が大きなショックを受け、日常生活を送ることに支障をきたす人も多く、社会から孤立し、悲しみを分かち合えない自死遺族は累積され続けている。

本来であれば、故人を偲ぶ誰もが集える場である葬儀や法要が、たとえば恋人や友人など、故人との関係性によって参列できなかったり、さらには悲しみの比較、責任転嫁、世間体などが気にされることにより、最もダメージを受けている人にとって過酷なものとなってしまっている現状がある。

この法要は、このような実態に対し、安心して故人・仏さまに向き合える場となることを願って、宗派を超えた僧侶らによって、東海地方の自死遺族会などに呼びかけ厳修されている。



INFORMATION

教化センター日報
■2017年9月～11月

- 9月1日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」学習会
5日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習
11日 研究業務「平和展」学習会
15日 研究生・実習「真宗門徒講座（はじめての『歎異抄』⑤）」
25日 教化研修「聖典研修①」（東館紹見氏）
29日 研究業務「平和展」学習会

- 10月4日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
6日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習
20日 研究生・実習「真宗門徒講座（はじめての『歎異抄』⑥）」
27日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習
11月1日 研究業務「平和展」学習会
6日 教化研修「聖典研修②」（東館紹見氏）
15日 研究生・実習「真宗門徒講座（はじめての『歎異抄』⑦）」
22日 研究業務「平和展」学習会
24日 研究生・実習「真宗本廟一日参拝」
27日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習

事務休暇・図書整理について

事務休暇

- ・2017年12月29日(金)～2018年1月8日(月)

図書整理

- ・実施期間：2018年1月29日(月)～2月9日(金)
- ※上記期間中は書籍、視聴覚教材の貸出を停止させていただきます。（館内閲覧は可）
- ※借り受け中の書籍、視聴覚教材は1月26日(金)までにご返却をお願いいたします。

第29回平和展「仏教の社会活動 一日中戦争と大谷派」

- 【日 時】2018年3月16日(金)～22日(木) 午前10時～午後6時
※初日は午前11時から／最終日は午後5時まで
※3月20日(火)午後4時、特別学習会を開催

【会 場】名古屋教務所1階 議事堂

【入場料】無 料

主催：名古屋教区教化センター 協力：名古屋教区教化委員会、名古屋別院

名古屋別院 春のお彼岸への参拝とともに、是非お立ち寄りください

《雑感》

教化センター業務の一環として、名古屋別院が毎月発行する『名古屋御坊』の編集に携わるようになり、早一年。本誌と並び、教化センターの情報を外部に発信する貴重な機会と思い、私なりに試行錯誤を続けている。

その中で、来春掲載予定の特集記事を担当する一員になり、勉強を進めるうちに“動的平衡”という言葉を知った。生命は分子レベルで分解と合成を繰り返し、絶えず動き、変化し続ける流れの中で平衡（バランス）を保っている、という生命科学における概念のことだ。

それはまるで、出あった縁によって移ろい変わりゆく私の姿を、科学の視点から言い当てているかのようだった。同時に、科学という学問に対する「怖い」「自分とは無関係」といった先入観が打ち破られる思いがした。

しかしそれも『名古屋御坊』の編集に携わり、特集記事を担当する一員になったからこそ、知り得たこと。改めて、縁の不思議さを感じている。

(て)

■教化センター

〈開 館〉月～金曜日 10:00～21:00
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸 出〉書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

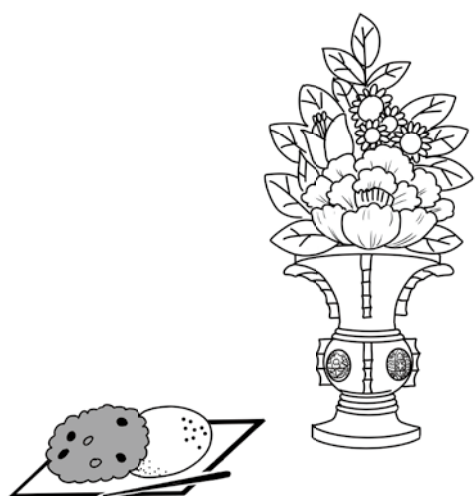
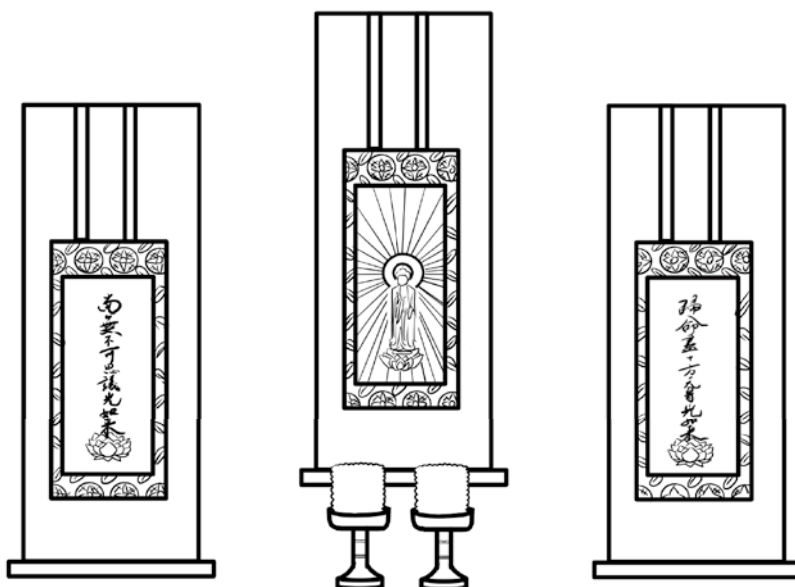
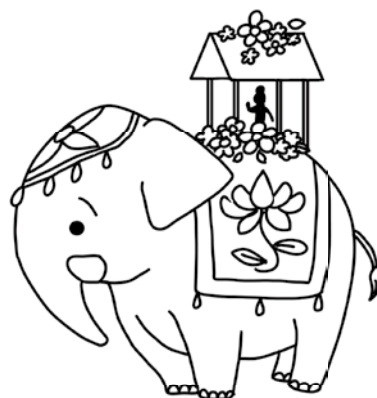
■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

お東ネット

検索

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどとしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。